



## 最後の一万円

東京都・暁星中学校 2年 土屋 駿

今の僕が1万円というお金を使い切るのは、そう難しいことではありません。マンガ本なら、20冊は買えるでしょう。友達と遊びに行き、食事をして、3回で1万円使ってしまうでしょう。何かにお金があるときは、母にももらったり、いろいろな時にもらうお小遣いを勝手に使ったりできます。当然学生の僕は仕事をしていないので、もらったお金で欲しいものを買ったりしています。お金がなくて困ったこともないし、ありがたいと感じたこともないと思います。そんな僕には、どうしても使えない1万円札があります。

僕には3年前、98才で亡くなった曾祖母がいました。僕は祖母の母親であるそのおばあちゃんのことを、「大きいおばあちゃん」と呼んでいました。小さな頃から、いろいろな物を買ってくれたり、頻繁にお小遣いをくれたりしました。僕は週に一度は会いに行くし、旅行に行ったり、手をひいて歩いたりしました。亡くなるまでに入院することはありましたが、いつも元気で僕のことをとてもかわいがってくれていました。僕が何かを欲しそうに見ているだけで、「それはおばあちゃん買ってあげる。」と、すぐにお金を出してしまう人でした。だから、「大きいおばあちゃん」に買ってもらうのは当たり前であまり感謝もしていませんでした。

「大きいおばあちゃん」が亡くなったのは、12月30日でした。その前、「大きいおばあちゃん」にとって最後のクリスマスに、「お前は1月が誕生日だから、クリスマス、お年玉、誕生日とお小遣いが多い時期だね。」と、笑いながらくれた1万円。僕はいつものように当たり前のようにその1万円をもらいました。けれども、「大きいおばあちゃん」とのお正月は来ませんでした。だから、このクリスマスにもらった1万円は、「大きいおばあちゃん」からの最後のお小遣い、最後の1万円になったのです。

当たり前のことですが、1万円札はどれも同じお金です。同じ価値があり、

同じだけのものが買えます。だけど、この最後の1万円札は僕にとっては他の1万円札とはちがう1万円札です。小さな封筒に入れられて、しわしわだったその手から手渡された最後の1万円札。もう二度とその手から受け取ることでできない1万円札です。

「大きいおばあちゃん」が亡くなって、母が言いました。「何か大きいおばあちゃんの思い出になるものを買ったらいいんじゃない。」思い出になるもの。お金のままにしていたら、他のお金と一緒にになってしまうだけだから、物にして残しておこう。僕も最初にそう考えました。さて、何を買おう。大好きな映画のDVD。けれど、いつかは飽きて、見なくなるかもしれない。ずっと使えそうな皮の財布。落としてなくしてしまうかもしれない。僕がそれを見た時に、「大きいおばあちゃん」と過ごした時間を思い出せるような何かは、思いつきませんでした。僕はもうしっかりと記憶を持ってられる年だから、「大きいおばあちゃん」のことを忘れることはないと思います。たまに、母や祖母と思い出しては、笑いをしたりもします。だから、余計に物に変えるのは難しく思えるのです。ずっと大事にしておけるものなんてない気がして。僕にとっては、「大きいおばあちゃん」との思い出はずっと大事なものであり続けるから。

結局、3年が過ぎても、最後の1万円で買いたい物は考えもつかず、その時その時欲しい物はあっても、「大きいおばあちゃん」の最後の1万円札を使う気にはなれません。僕にとっては、お金であって、お金でない物になってしまったようです。1万円の価値以上の特別な1万円札です。

僕はたまにその1万円札の封筒を開けて、中をのぞいてみます。いつもと変わらず、他の1万円札と同じ柄のお札が入っていることを知りながら。

お金は使わないと意味がないでしょうか。大事にとっておいてはだめでしょうか。いつか、この1万円札を僕が使うとしたら、何に使うのでしょうか。それほど大切な何かを見つけるのか、それとも、「大きいおばあちゃん」との思い出なんてあまり大切なことではないと思ってしまうのか、今の僕にはわかりません。もしかしたら、僕が少し大人になって、お金はお金、なんて割り切れるようになるのかもしれませんが。それでも、今はまだ、「大きいおばあちゃん」の声が聞こえそうな今はまだ、この1万円を使う時期ではなさそうです。しわしわのその手で折って封筒に入れてくれた、最後の1万円札だから。